源氏物語の救済思想

――第二部の方法――

岩瀬法雲

1 序
2 紫上の自制
3 紫上の解放感
4 作者の救済観
5 第二部の方法
6 結び

一 序

六条院における紫上の地位は多くの他の女性達とは異り、比較を絶していた。

そこらの御中にもすぐれたる御志にて、並なきさまに定り給ひけるも、いと道理と思ひ知らるるに、（中略）出で給ふ儀式の、いとことに装ほしく、御輦車などゆるされ給ひて、女御の御有様に異ならぬを、思ひくらぶるに、さすがなる身の程なり。（日本古典全書藤裏葉　一九段）―以下、引用はこの本による。

明石姫君入内三日後、始めて紫上は明石上に対面した。これはその時の明石上から見た紫上の有様である。いうまでもなく藤裏葉の巻は、源氏物語第一部の最後の巻である。これで、作者が第一部で紫上に与えようとしていた地位が理解される。ところが第二部となると、女三宮の降嫁という降って涌いたような問題が起り、「並なき」正妻の座は忽ちぐらつき、源氏に対する不信感が深く胸の中に巣喰うようになる。

年頃さもやあらむと思ひし事どもも、今はとのみもて離れ給ひつつ、さらばかくこそはと、うちとけゆく末に、ありありて、かく世の聞耳も斜ならぬことの出で出ぬるよ。思ひ定むべき世の有様にもあらざりければ、今より後もうしろめたくぞ思しありぬる。（若菜上　四一段）

朝顔斎院などに対して気をもんだことも事なくすんで、もう大丈夫と安心していた今頃になって、こんなことが持ちあがるなんて。思えば、安心のできる仲ではなかったんだ。今後とてわかるものか、――これが彼女の心中である。これは女三宮輿入れ三日の夜、香なども一層入念にたきしめて、源氏を送り出したあとのことである。

源氏のいない夜は、いつまでも起きていて、侍女達に物語など読ませて聞くにつけ、彼女の思うことは、

昔語どもにも、あだなる男、色好、二心ある人にかかづらひたる女、かやうなることを言ひ集めたるにも、つひによる方ありてこそあめれ、あやしく浮きても過しつる有様かな。げに、宣ひつるやうに、人より異なる宿世もありける身ながら、人の忍び難く飽かぬ事にする物思ひ離れぬ身にてや止みなむとすらむ、あぢきなりもあるかな。（若菜下　七四段）

こう思い続けて終夜苦しみ、発病してしまう。紫上三十九才の正月である。女三宮の輿入れは紫上三十二才の二月であったから、不信感は満七年間彼女を苦しめていたわけである。その後病状は好転せず、ある夜、源氏が宮の所へ行っている間に死ぬのである。ところが「絶え入り給ひぬ」（若菜下　九五段）と知らせを受けた源氏があわてて帰り、一層の大願を立てて祈らせると、「やうやう生きいでさせ給ふ」（若菜下　九六段）とあるように蘇る。そうして、四十三才八月十四日、中宮（明石姫君）に手を取られて、「消えゆく露」（御法一三段）のように本当に死ぬまでは、同じ彼女でありながら、その心境は全く異なり、平安な日をくらすことになる。一体、これは何を意味するのであろうか。作者は物語制作において、なぜ、そんな異常な方法を用いたのか。このことは、この物語が、これまでの部分（第一部）と性質を異にする第二部の主題を暗示しているように思われるのである。

二　紫上の自制

不信感と平行して、それを自制する気持は、若菜上下、紫上が死に倒れるまで、彼女に関する記事の大部分がそれを繰り返している。源氏から女三宮のことを始て伝えられた時でも、彼女の口を開いた第一声は、

あはれなる御譲りにこそはあなれ。ここには、いかなる心置き奉るべきにか。めざましく、かくてはなど咎めらるまじくは、心安くても侍りなむを、（若菜上　二九段）

朱雀院の御依頼に同情し、宮に対して隔て心のないこと、目障りなと邪魔者扱いにさえされなければ、というのである。それを聞いた源氏の方がかえって戸惑いして、「あまりかううちとけ給ふ御許しも、いかなればと、後めたく」（同上）と、それでは自分に愛がなかったのかと、不安がるくらいである。彼は、この方面における紫上の傾向をよく知っていた。「はかなき御すさびごとをだに、めざましきものに思して、心やすからぬ御心ざまなれば、如何おぼさむ」（同上）と、心配していた矢先だからである。源氏は、今回のことを伝えるのにどんなにか躊躇していたのであった。

この事をいかに思さむ、わが心はつゆもかはるまじく、さる事あらむにつけては、なかなかいとど深さこそまさらめ、見定め給はざらむ程、いかに思ひ疑ひ給はむ、など安からず思さる（若菜上　二八段）

だから、源氏は背負い投げを食った形である。紫上には、女三宮、明石上と異り、身分的に、あるいは経済的に背景がない。それに実子もない。彼女の父式部卿宮は勝手な人で、こんな時には、彼女のため頼みにならない。北方は彼女を始めから敵視している。源氏の愛情一

つが彼女の生きる力であった。だから彼女は、今回のことで一大決心を試みたのである。それは命がけの努力であったに違いない。彼女の長い二重構造の生活が始まる。――

女三宮は堂々と六条院に乗り込んで来る。それを心では「なまはしたなく思」っていても、「つれなくのみもてなし」て、源氏と一緒に宮の世話をあれこれとする。新婚三日、夜がれなく渡る源氏のため、前述のように着物などにも一層入念に香をたきしめてやるのであるがどうかすると、そのままに沈み込んでしまう彼女である。「なまはしたなく思さるれど、つれなくのみもてなして、」（若菜上　三九段）「いよいよたきしめさせ給ふものから、うちながめてものし給ふ気色」（同　四〇段）、それぞれの傍線が、その二重構造を表現する。作者は紫上の心理を描写するのに、しばしばこの形を繰り返す。源氏から女三宮のことを始めて伝えられた時も、「人わらへならむ事を、下には思ひ続け給へど、いとおいらかにのみもてなし給へり」（同　三段）、また、人を人とも思わぬ女三宮方の態度を憤慨する女房達に対○しても、「つゆも見知らぬやうに、いとけはひをかしく」（同　四一段）、それのみなからず、彼女は宮の降嫁を歓迎しているという。

かくこれかれあまたものし給ふめれど、御心にかなひて、今めかしくすぐれたる際にもあらずと、目なれてさうざうしく思したりつるに、この宮のかく渡り給へるこそめやれけれ。（若菜上　四二段）

源氏のためほっとしたというのである。そうして、「なほ童心のうせぬにやあらむ、われも睦び聞えてあらまほしきを」（同上）と、どこまでも明かるく出るものだから、源氏が驚いたように女房達も「あまりなる御思遣かな」とあきれる。六条院の他の夫人達が「心中お察し申します。もともとあきらめている私たちの方が、かえって気楽です」と慰めると、「かくおしはかる人こそなかなか苦しけれ、世の中もいと常なきものを、などてかさのみは思ひ悩まむ」（同上）と高く出る。この「世の中」が、夫婦仲（古典全書注）にしろ、世間一般（湖月抄・対校・古典大系）にしろ、紫上が始めて経験する無常感である。それはとにかく、彼女の言っていることは飽くまでも虚勢であって、内心の苦悶には変りはない。何げなく書いている手習を源氏が硯の下から見つけると、「身にちかく秋や来ぬらむ見るままに青葉の山もうつろひにけり（若菜上　六五段）この気持が次第に彼女に出家を願う心を誘う」ことになった。

年月経るままに、御仲（源ト紫上トノ）いとうるはしく、睦び聞え交し給ひて、いささか飽かぬ事なく、隔も見え給はぬものから、「今は、かうおほぞうのすまひならで、のどやかにおこなひをもとなむ。この世はかばかりと、見はてつる心地する齢にもなりにけり。さりぬべき様に思しゆるしてよ」と、まめやかに聞え給ふ。（若菜下　二四段）

そういうことを聞くたびに源氏は、「あるまじくつらき御事なり」と抑え、自分もそれを願っていたのたが、後に残るあなたのことを思って延ばしているのだという。

対（紫上）、かく年月に添へて、（明石上ヤ女三宮ガ）方々にまさり給ふ御おぼえに、わが身はただ一所の御もてなしに、人にはおとらねど、あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ、

然らむ世を見はてぬ前に、心と背きにしがな、とたゆみなく思しわたれど、（同　三八段）

実家に対する劣等感、源氏に対する不信感からしきりに出家を思うのだけれども、「さかしきやうにや思さむとつつまれて、」口にすることも控える。この頃から、源氏の通って来ることは更に遠ざかる。東宮の妹の女一宮を養育することで、「夜がれの程」をなぐさめる。そういう時に源氏の口にすることばは決っている。

思の外に、この宮のかく渡りものし給へるこそは、なま苦しかるべけれど、それにつけては、いとど加ふる志の程を、御自らの上なれば、思し知らずやあらむ。（同　六九段）

源氏は本当にそう思っているのかもしれないが、心に痛手を受けた彼女にはそうは取れない。

宣ふやうに、ものはかなき身には過ぎにたる余所のおぼえはあらめど、心に堪へぬもの歎かしさのみうち添ふや、さは自らの祈なりける。（同上）

心一つに堪え切れない、何かと嘆かしさばかりが次々につきまとって、緊張し、それが私自身生きるための祈りとなって、今までも長らえて来たのでしょう、思えば長い苦悩の連続でした、というのである。こんなことを、彼女は言ったことがない。これこそ彼女の本音である。ここでもまた出家を請う。

「まめやかには、いと行先少き心地するを、今年もかく知らず顔にて過すは、いとうしろめたくこそ。さきざきも聞ゆる事、いかで御ゆるしあらば」、と聞え給ふ（同　七〇段）

源氏は相変らず、「それはしも、あるまじき事になむ。（中略）なほ思ふさま異なる心の程を、見はて給へ」を繰り返すばかりで、彼女の内面を考えてやろうとはしない。

しかし、彼女の自制はかえって源氏に美しい印象を与えたと見える。その魅力に、彼女の苦悶がありのままに理解されなかったとも言える。前述、新婚三日、夜がれなく出かける源氏のために、同じ心で何かと世話をやく彼女を、「いとらうたげなる御有様を、いとどあり難しと思ひ聞え給ふ。（若菜上　三九段）とか、「御衣どもなど、いよいよたきしめさせ給ふものから、うちながめてものし給ふ気色、いみしくらうたげにをかし」（同　四〇段）とか、また、「身にちかく」の手習のところでは、「心苦しき御気色の、下には自ら漏りつつ見ゆるを、ことなく消ち給へるもあり難くあはれに思さる」（同　六五段）とか、「ありがたし」といい、「をかし」といい、「あはれ」といい、彼女の心になるのでなく、外からながめる気持である。苦悶の表情は美的なものであろうはずがない。そんな印象を与えてしまうのはそのなまなましさを殺そうとする努力のためである。苦悶をそのまま出すことは、彼女の教養が許さないのである。

君こそは、さすがに隈なきにはあらぬものから、人により事に従ひ

いとよく二すぢに心づかひはし給ひけれ。さらに、ここら見れど、御有様に似たる人はなかりけり。いとけしきこそものし給へ。（若菜下　七二段）

源氏が、葵上・六条御息所・明石上と次々に批評して来て、紫上に及んで言ったことばである。勿論、源氏にも彼女の嫉妬心は分かっている。けれどもその苦しみを、彼女は事と場合によって使い分ける、他の女性達には見られない、その知性に魅せられてしまうのである。「見知りゆくままに、まことの心ばせおいらかに落ち居たるこそ、いと難きわざなりけれとなむ思ひ果てにたる」（同　七一段）女性評論に当って言った、源氏の好みに合致する。しかし、それは、彼女の痛ましい努力の結果そうなっていることを知らない。蘇った彼女が、後に源氏の前でふと本心を漏らす所がある。夕霧が、落葉宮に熱中して源氏が憂慮する時である。

女ばかり、身をもてなすさまも所狭う、あはれなるべきものはなし、物のあはれ折をかしきことをも、見知らぬさまに引入り、沈みなどすれば、何につけてか、世に経る栄々しさも、常なき世のつれづれをもなぐさむべきぞは。（中略）あしき事よき事を思ひ知りながらうづもれなむも、いふかひなし。わが心ながらも、よき程にはいかで保つべきぞ、と思しめぐらすも、今はただ女一宮の御為なり。（夕霧　五五段）

「今はただ」というところ、「紫上の御身は大方にをさめ給へば也」と湖月抄にある通り、その時の彼女の心境ではない。恐らく、女三宮のために苦んだ当時の自分を回想して、この嘆息となったのに違いない。源氏が、「ここら見れど、御有様に似たる人はなかりけり」と称賛しているが、本当の彼女はそうでなかったのである。だからこそ、前述の「あやしく浮きても過しつる有様かな、（中略）あぢきなくもあるかな」（若菜下　七四段）と、「思ひ続けて」、発病してしまったのである。発病した晩でも、

人々見奉りあつかひて、御消息聞えさせむと聞ゆるを、「いと便ないこと」と制し給ひて、堪へ難きをおさへて明し給ひつ（若菜下　七四段）

女三宮の所に行っている源氏に知らせようとしても、それをさせないくらいである。

三　紫上の解放感

苦悩が原因で発病し、死んだ紫上は、悲歎にくれる源氏の心中を仏も察してか、「やうやう生きいで給ふ」とあるように蘇る。蘇って彼女の発見したことは、今までとは逆に源氏の方から縋って来るように見える彼の態度であった。

世の中になくなりなむも、わが身にはさらに口惜しき事残るまじけれど、かく思し惑ふめるに、空しく見なされ奉らむが、いと思ひぐまなかるべければ、思ひ起して、御湯などいささか参るけにや（若菜下　一〇五段）

その源氏を彼女もほっておけないという状態である。やや快方に向って来た一日、折柄池の蓮が美しく咲いていた。それを前にして源氏が、「かく見奉るこそ夢の心地すれ。いみじく、わが身さへ限と覚ゆる折々のありしはや」と言うと、

消えとまるほどやは経べきたまさかに蓮のつゆのかかるばかりを（同　一〇七段）

「これはほんの小康です、いつまでこの状態が続きますやら」というのに対して、源氏は、

契りおかむこの世ならでもはちす葉に玉ゐる露のこころへだつな（同上）

この世は勿論、来世でも少しの隔意なく一蓮託生であることを誓おうというのである。今までの源氏なら、心は女三宮の所へ行っていながら、「なほ思ふさま異なる心の程を見はて給へ」を繰り返すばかりだったろう。従って、彼女の死は、源氏をも救ったことになる。それが、御法の巻になると、

年月かさなれば、たのもしげなく、いとどあえかになりまさり給へるを、院（源氏）の思ほし歎くこと限なし。しばしにても後れ聞え給はむことをば、いみじかるべく思し、（御法　一段）

一蓮託生の源氏の誓いはますます固く、それに対して紫上も、「年頃の御契かけ離れ、思ひ歎かせ奉らむ事のみぞ、人知れぬ御心の中にも、ものあはれに思されける」と、追いすがる彼の愛に応えている。だから、「同じ蓮の座をも分けむと、契り交し聞え給ひて、頼をかけ給ふ御中」とある。こうした紫上には、もう源氏に対する不信感は勿論、嫉妬を自制する苦悩もない。それらから解放されて、それこそ沈み行く夕日のような静かさにある。もしも彼女があの時蘇らなければ、永久にこの平安は味わうことができなかったであろう。

後の世の為にと、尊き事どもを多くせさせ給ひつつ、いかでなほ本意あるさまになりて、しばしもかかづらはむ命の程は、行を紛なくと、たゆみなく思し宣へど、（御法　一段）

この出家の願いは、「後の世の為に」とある通り、かってのような「然らむ世を見はてぬ前に、心と背きにしがな」と、嫉妬や劣等感に催されてのそれではない。謂わば、無常観に純化されている。そこには反動的なものは認められない。往生人は、「七日以前死ノ到来ヲ知ル」と言われる。彼女の心境はまさにそれであったろうが、それらしい振りをすることは、彼女の知性が許さない。「御心の中に、思しめぐらすこと多かれど、さかしげに、亡からむ後など宣ひ出づる事もなし」（御法　九段）と、遺言めいたことも控えようとするのである。側近の者たちに「ただなべての世の常なき有様を、おほどかに言少なるものから、浅はかにはあらず」言うだけであるが、かえってそれが聞く者の心を引きつけた。

彼女は元来おいらかな人であった。しかし自制にあけくれた年月は、自分のことで一ぱいで、周囲の者を顧るまでには到らなかったようである。蘇ってからは異る。唯彼にとなく哀い心を示したことが、

御法の巻には繰り返し語られている。その三月、法華経千部の供養をする。「残少し」と自覚する彼女には「よろづの事あはれに」（御法四段）思われる。盛儀に参集した楽人舞人たちに対しても、「年頃かかる物の折ごとに、参りつど」う人々であったので、「今日や見聞き給ふべきとぢめなるらむ」と思われて、「さしも目とまるまじき人の顔どもも、あはれに見え渡され」（同　五段）るのであった。まして四季折々の演奏に競争意識を動かしはしたが、さすがに親しく交った花散里や明石上と別れるのは悲しい。中でも花散里には、「絶えぬべきみのりながらぞ頼まる世々にとむすぶ中のちぎりを」（同　六段）と、来世も永遠にと友情を約束しようとする。

夏になって紫上の衰弱は加わる。中宮が見舞に来られる。夜、供奉の人々の名対面を聞いても、「その人かの人など、耳とどめて」名残を惜しむ。「この世の有様を見はてずなりぬるなどのみ思せば、よろづにつけてものあはれなり」（同　八段）とそこにもある。果ては長年仕えて来た侍女達、特に身寄りのない者の行末を心配して、中宮に、「御心とどめて、尋ね思ほせ」（同　九段）と依頼したり、庭の紅梅と桜のことまで、「花の折々に心とどめてもて遊び給へ」（同　一〇段）と、幼い匂宮にいいつけたりする。若菜の巻の死でも彼女はそれを予感しないではなかった。それは、例の中宮が見舞に来られた時、連れて来られた女一宮を見て、「おとなび給はむをえ見奉らずなりなむ事。忘れ給ひなむかし」（若菜下　七七段）といって泣くと、源氏が、「ゆゆしく、かくな思しそ。さりともけしうはものし給はじ。心によりなむ、人はともかくもある」と、慰めていることでもわかる。しかし、その心には動揺はあっても余裕はない。ところで疎ってからは、常に死は念頭を去らないはずだのに、余裕に充ちている。御法の巻には、「ゆゆし」の語は一語もない。

若菜の巻下では、七回中六回まで紫上のことで使用されている。死を予感したことは同じなのだが、その内容が違うのである。前者は死に対している。後者は死を越えている。死に媒介されたからである。

四　作者の救済観

自制は、特に女性の望ましい処世の方法として、この作者の一貫した思想である。

紫上が発病する直前、源氏が、

多くはあらねど、人の有様の、とりどりに口惜しくはあらぬを、見知りゆくままに、まことの心ばせおいらかに落ち居たるこそ、いと難きわざなりけれとなむ思ひ果てにたる。（若菜下　七一段）

と前置きして、葵上・六条御息所・明石上それぞれに批評して、紫上に及ぶ所がある。「思ふにはたのもしく、見るにはわづらはしかりし人ざま」が葵上、「心深くなまめかしき例には、先づ思ひ出でらるれど、人見えにくく、苦しかりしさま」が御息所、「うはべは人に靡き、おいらかに見えながら、うちとけぬ気色下に籠りて、そこはかとなくはづかしき所」あるのが明石上、共に気づまりさのあるのが共通の欠点である。それに対して、紫上は、前にも言った通り、同じく嫉妬心はあっても、相手と場合によって、「いとよく二すちに」使い分けることができた。だから、「さらにここら見れど、御有様に似たる

人はなかりけり」（同　七二段）と、その聰明さ、寛大さを称讃するのである。病気平癒を仏神に祈らせる願文にも、

掟広きうつはものには、幸もそれに従ひ、（中略）心ぬるくなたらかなる人は、長き例なむ多かりける。（若菜下　七七段）

と、彼女の「心ばせのあり難く罪軽きさま」を明記している。

しかし、第一部の紫上には必ずしもそうでない所もあったのか、藤裏葉の巻に、明石姫君の入内が決まって、紫上が賀茂の社に詣でるところがある。例によって、明石上・花散里等六条院の女性たちを誘うが、「なかなかさしもひき続きて、心やましきを思して、誰も誰もとまり給ひて」（同　一五段）、とある。紫上の一行に続いては御供らしく見えるのを嫉がったのである。そこを注して細流抄には、「此時分紫上の栄花の盛也。若菜よりは思ふ事のあるなり」とある。源氏は、葵上と六条御息所との車争いの昔を思い出して、

時による心おごりして、さやうなる事なむなさけなき事なりける。（中略）すべていと定なき世なればこそ、何事も思ふままにて、生けるかぎりの世を過さまほしけれど、残り給はむ末の世などの、たとしへなきおとろへなどをさへ、思ひはばからるれば（同　一五段）

と誡めている。傍線の所、湖月抄には、「さて紫上も、只今の御威勢にまかせて、情なきことし給ふなとの誡め也」とあり、古典大系にも「勢にまかせて心驕りを慎しみ、他の婦人方と、親愛の情を交わしなされよ」とある。第二部の紫上にはこんな誡めの必要はない。あの自制は、女三宮降嫁という六条院の情況一変の中で、生きて行かねばならない、彼女の力一ぱいの姿勢であったのである。雨夜の品定めの最後のことばは、

すべて心に知れらむ事をも、知らず顔にもてなし、言はまほしからむ事をも、一つ二つの節は、過すべくなむあべかりける（帚木　一五段）

物定めの博士になっていた馬頭の結語である。それを聞きながら源氏が心の中で、思い続けていたことは、藤壺の宮のことである。「これは足らずまたさし過ぎたる事なくものし給ひけるかな」と、その中庸を讃美しているのであるが、この連想は、自制は、偽装の至徳である中庸につながることを暗示する。偽者の家に生まれた作者がそれを実行しようとしたことは、繰り返し「日記」に見える。

ほけられたる人に、いとどなりはてはべれば、「かうはおしはからざりき。いと艶にはづかしく、人に見えにくげに、そばそばしきまして、物語このみ、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに、見おとさんものとなん、みな人々いひ思ひつつにくみしを、見るには、あやしきまでおいらかに、ことひとかとなんおぼゆる」とぞ、みないひはべるに、はづかしく（中略）、ただこれぞわが心と、ならひもてなしはべるありさま（日本古典全書　紫式部日記　三五段）――以下「日記」からの引用はこの本に依る――

傍線の箇所は宮仕えに出るまでの彼女に対する世評であった。それが、実際に接すると、まるで別人の観があるというのである。嫉妬と虚栄に明け暮れる女房達に対する警戒から、殊更に努力していたことは、中略以下のことばでわかる。この外見が効を奏して、中宮までが、「いとうちとけては見えじとなむ思ひしかど、人よりけに、むつまじう」と、案に相違したと言われる。そこで彼女はますます自信を得て、「さまよう、すべて人は、おいらかに、すこし心おきてのどやかに、おちゐぬるを、もととしてこそ、ゆゑもよしも、をかしく、うしろやすけれ」（同　三五段）と、言い据えるに至った。

それでは彼女は、心の底からそれに安住できたかというと、それは別問題である。彼女の「おいらか」さ、「のどやか」さは、対人関係に限ってである。彼女自身の魂は、未亡人となって「としごろつれづれにながめあかしくらし」ていた昔も、宮仕えの今も変りなく、今の方がかえって、「さものこせることなく、思ひしる身のうさかな」（同　二六段）と、嘆かねばならないほどである。斎院の女房中将の君を始め、和泉式部・清少納言・左衛門内侍と、多くの同僚を槍玉にあげて来た例の消息文の結びにも、

けしからぬ人を思ひきこえさすとても、かかるべきことやははべる。されど、つれづれにおはしますらむ、また、つれづれの心をごらんぜよ。（同　四十一段）

依然として魂は「つれづれ」の状態にあるのである。だから行幸を迎える準備に周囲が沸き返っている時でも、水の中に落ちた一滴の油のように孤独で、池の水鳥を見ても、「われもうきたる世をすぐしつつ」と嘆き、「かれもさこそ、心をやりてあそぶとみゆれど、身はいとくるしかんなり」（同　一九段）と、「思ひよそへ」ずにはいられなかった。彼女は、存在の根底から不安なのである。一体、この不安は何から来るのか、

めでたきこと、おもしろきことを見きくにつけても、ただ思ひかけたりし心の、ひくかたのみつよくて、ものうく、おもはずに、なげかしきことのまさるぞ、いとくるしき。（同上）

この「思ひかけたりし心」は、出家を願う心である。この心と、現実の毎日に矛盾があるのである。これは「日記」を貫く彼女の根本精神で、あの「おいらか」な外見にも係らず、石のように彼女の胸底にすわっているものである。しかし、「一といふ文字を」書くことすらしないというような外見にも限度がある。

人は、というとも、かくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく、経をならひはべらん。世のいとはしきことは、すべてつゆばかり心もとまらずなりにてはべれば、ひじりにならんに、懈怠すべうもはべらず。（同　四〇段）

思い余って本音を吐いてしまわずにはいられなくなった。この語気には、押えに押えられていたものの爆発する響きがある。教養として「おいらか」さ、「さりげな」さを心掛ける彼女には、「思ひかけたりし心」は心として、時にそれに魅力をさえ感じることがある。姫娘

の苦しさを「さりげなく、もてかくさせ給ふ」（同一段）中宮の「みありさま」がそれである。しかし、それは飽くまでも「うきよのなぐさめ」（同上）であって、うきよの救いではない。彼女があれほど努力する自制も結局はこの世的のもので、他人に対する姿勢にすぎない。その努力に自分が抵抗を感じるだけに、自制を心得ない同輩のふるまいには、腹立たしくさえなるのである。自制に安らぎを得ていれば、そんな官勁には出なかったろう。

元来仏教では、自制を柔和忍辱の名で特に尊ぶ。それを讃歎した文は諸経に散見する。作者もよく通じていたと思われる法華経についても同じである。法華経行者の心構えとして、「如来の衣を着、如来の室に入り、如来の座に坐せ」とあって、それを説いて、

如来の室とは一切衆生の中の大慈悲心これなり、如来の衣とは、柔和忍辱心これなり。如来の座とは、一切法空これなり。（法師品第十）

これでわかるように、それは単なる柔和忍辱ではないのである。同時に、一切法空、即ち絶対無に媒介されていなければ、ただの対人的なもの、功利的なものに堕して、法悦は伴なわないことを意味する。従って、経にいう柔和忍辱は、如来の使者として、如来の力に催されてするのである。できたからといって、誇る何もないはずである。まして、それを心得えないものを、憎みこそすれ、非難する筋合いのものではない。作者はこの間の事情をどう考えていたろうか。

日本仏教が正面から絶対無と対決したのは鎌倉期に入ってからである。栄西や道元によって禅が伝えられてからである。浄土教でも親鸞の他力の念仏は、論理的には絶対無の媒介を意味する。作者の時代はまだその時代ではなかった。現世的にも来世的にも救済を願う者は、加持祈禱や造仏造塔によるのが一般であった。そうした方法は謂わば投資によって利益を得ようとする商業行為に似ている。仏の慈悲はもとより太陽の光のように、欲する欲せぬに関係なく宏大無辺である。ほしければさかしらな小細工は捨てて、光の海にとび込むべきである。「是心是仏」といい、「身心脱落」といい、「自然法尔」といい、とび込み得た者がその消息を伝えたことばであろう。反省力の強い作者も、理屈では分かっていても、実際には難しかったと見える。

ひじりにならんに、懈怠すべうもはべらず、ただひたみちにそむきても、くもにのぼらぬほどの、たゆたふべきやうなんはべるべかんなる。それにやすらひはべるなり。（日記　四〇段）

「ひじり」とは僧正・僧都・律師といった官僧ではない。当時、市井に隠れていたひたむきの求道者である。その日常生活は既に絶対無に媒介されていたに違いないことは、今昔物語第十三春朝持経者等の話に明らかである。（このことについては一昨年、拙文「紫式部日記を貫くもの」に述べたから省略する）

その「ひじり」云云というほどの抱負を持って出家しても、死なない以上は真実の救済はないというのである。だから出家はしないのだと言う。自己批判にも奇貨なき作者の厳しさが覗われる。

勿論、紫上の自制は、「日記」の作者のように反勁的なものではない。源氏には魅力的にさえ見えたことは前に述べた。日記の作者が女房生活に反発を感じていたに対して、紫上は源氏を愛していたことでわかる。しかし、いずれにしても、功利心が伴なって救済感のないこ

とは同じである。日記の作者が出家の真際まで来ていながら、踏み切ることをしない消極的性は物語にも反映している。

夕霧につけ廻される落葉宮が、困り果てて出家しようとするとき、父帝朱雀院は、

世の憂きにつけて厭ふは、なかなか人わろきわざなり。心と思ひとるかたありて、今すこし思ひしづめ、心すましてこそ、ともかうも（夕露　五八段）

感情的な発作から出家すべきでない。興奮が醒めたら必ず後悔するというのである。それこそ、「仏もなかなか心ぎたなしと見給ひつべし。濁にしめる程よりも、なまうかびにては、かへりてあしき道にも源ひぬべくぞ覚ゆる」（帝木九段）と、早くから馬頭のいう通りである。

紫上を亡くして悲嘆にくれる源氏が、ある日明石上を訪ねる。彼の言うことを聞いていると、出家もしかねまじいので、それを諌めるように、明石上は、

いにしへの例などを聞き侍るにつけても、心におどろかれ、思ふより逆ふふしありて、世をいとふついでになるとか。それはなほわるき事とこそ。なほしばし思しのどめさせ給ひて（幻　一〇段）

宮たちも成人され、東宮の地位も不動なものになるまではいけないというのである。現世に未練が残るような出家は意味がない。

実は、それを言われるまでもなく、源氏自身、考えていたことなのである。紫上に取り残されて、

今はこの世にうしろめたきこと残らずなりぬ、ひたみちに行におもむきなむに、さはり所あるまじきを、いとかくをさめむ方なき心惑にては、願はむ道にも入り難くや、とやましきを、この思すこし斜に、忘れさせ給へと、阿弥陀仏を念じ奉り給ふ（御法　二〇）

とある。出家に対して、その心構えは極めて慎重であり、潔癖である。今は、あけくれ念仏と読経につとめる源氏が、側近の女房にわが身のありさまを語って、

この世につけては、飽かず思ふべき事をさをさあるまじう、高き身には生れながら、また人より異に、口惜しき契にもありけるかな、と、思ふこと絶えず。世のはかなく憂きを知らすべく、仏などの捉て給へる身なるべし（幻　四段）

人より以上に不幸に遭遇しなければならない宿命を痛感するにつけても、これが無常を悟らせるあたたかな仏の方便ではなかったかと思うのである。この述懐は、御法の巻にもあって、「いはけなき程より、悲しく常なき世を思ひ知るべく、仏などのすすめ給ひける身を」（二〇段）がそれである。源氏のこの発言は、それぞれ主題を異にする源氏物語の、第一部と第二部とを統一する根本精神のようである。更に続けて、「心強く過して、つひに来し方行く先も例あらじと覚ゆる悲しさを見つるかな」と結ぶのであるが、幻の巻でも同じように、

それを強ひて知らぬ顔にながらふれば、かく今はの夕近き末に、いみじき事のとぢめを見つるに、宿世の程も、自らの心の際も、残なく見はてて心安きに、今なむ露のほだしなくなりにたるを、（幻四段）

とうとう紫上にまで死に別れることになって、今こそ心にかかる何物もなくなったはずだのに、

これかれ（側近ノ女房タチ）、かくて、ありしよりけに目ならす人々の、今はと行き別れむ程こそ、今一際の心乱れぬべけれ。いとはかなしかし。わろかりける心の程かな（同上）

これでは結局生きている限り、出離の機会はないわけである。わが身の宿業を痛感する折角の菩提心が、また煩悩の雲にかくれて行く。所詮これが人間というものなのだというのであろうか。それが、「いとはかなしかし」であり、その腑甲斐なさが、「わろかりける心の程かな」である。だから真実の救済は死ななければという結論になる。これは、「くもにのぼらぬほどの、たゆたふべきやうなむ云云」の「日記」の心境と一致する。

五　第二部の方法

源氏が過去に遭遇した父母や愛する女性の死の数々を思い浮べ、整理し、意義づけて、

A世のはかなく憂きを知らすべく、B仏などの掟て給へる身なるべし（幻　九段）

傍線Aは、「人生の真実を知らすため」ということであり、Bは、「かねて仏から特別に予定されていたわが身」ということであるから初めから仏の慈悲に抱かれていたということになる。それを今、紫上の死によって知ったというのである。この告白は、今までの源氏にはなかった。紫上の死―無常に媒介されて、わが生涯は仏の慈悲の中に初めから摂取されていたことを知ったのである。「かわいい子」として、仏から「旅をさせ」られていた自覚である。あたかも、苦悩が極まって死んだ紫上が、死に媒介されて始めて心の安らぎを得たように。

同じことは、第二部の人物のそれぞれに言える。

無常は、必ずしも人間の生命だけに限らない。生活の万般について言えることは、

頼みたる方の事は違ひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。（中略）かねてのあらまし、皆違ひゆくかと思かに、おのづから違はぬ事もあれば、いよいよ物は定めがたし。不定と心得ぬるのみ、誠にて違はず（徒然草　一八九段）

兼好も言う通り、期待や予想に反する変化の相はみな無常である。実はわれわれは毎日無常の中で無常に操られて生きているのだけれど

も、それを深く考えようとはしない。外れが大きかった時だけ、こんなはずはなかったのにと感じるが、あとはまた忘れてしまう。

朱雀院は、あれほど期待をかけて源氏に託された女三宮を、わが手で出家させるという結果になり、柏木に許された女二宮の方が幸福をつかんだものと慰めていられたのに、これも空しく、はては未亡人になるということになってしまった。このことは、院にままならぬこの世を教えた。「さまざまに飽かず思さるれど、すべてこの世を思しなやまじと忍び給ふ」（横笛　三段）と、不満に堪え忍ぶ力を与えた。特に入道の宮に対しては、「御行の程にも、同じ道をこそは勤め給ふらめ」（同上）と、新しい親しさで、院に結びつけた。即ち、この世のみならず、来世も同じ道を求める者として、道友の愛を感じさせた。「かかるさまになり給ひては、はかなき事につけても、絶えず聞え給ふ」（同上）とある。

御寺の傍近き林に、ぬき出でたる筍、そのわたりの山に掘れる野老（ところ）などの、山里につけてあはれなれば、奉れ給ふとて、御文こまやかなる端に、

春の野山、霞もたどたどしけれど、志深く掘り出でさせて侍る、しるしばかりになむ。

世をわかれ入りなむ道はおくるともおなじところを君もたづねよ

いと難きわざになむある。（横笛　四段）

筍といい、野老といい、庶民的な季節の野菜である。一人の山僧が後輩の道友をいたわるしるしにそれを贈る。それにつけても、道の精進を促すのである。宮の婿選びに腐心された以前の院にはなかったところである。

院のこの心の転換は、宮に授戒された直後に既に兆は見える。宮が出家したいと訴えた時、それを制止する源氏に、

「かくなむ道み宣ふを、今は限のさまならば、片時の程にても」（柏木　一八段）とか、「弱りにたる人の、限とてものし給はむことを、聞き過さむは」（同上）とか、宮に対する敬語が見えるのに、授戒を終った後では、同じ源氏に、

世の中の今日か明日かに覚え侍りし程に、また知る人もなくて過はむ事の、あはれにさり難う覚え侍りしかば、御本意にはあらざりけめど、かく聞えつけて、年頃は心安く思う給へつるを、もしも生きとまり侍らば、様ことにかはりて、人繁きすまひはつきなかるべきを、さる山里などにかけ離れたらむ有様も、またさすがに心細かるべくや。様に従ひて、なほおぼし放つましくなむ。（柏木二二段）

今までなら、当然傍線の所には敬語があるはずである。それがないのは、もはや源氏の北の方でなく、道の後輩として扱っていられるためである。少くとも内親王としてなら、（源氏の北の方でなくても）敬語はあるはずである。それだけ、院には宮を見る目が、人間的に変られたのである。—無常に媒介されたためである。

自分の判断によって何一つ動いたことのない人形同然の女三宮が、始めて一人の人間に立ち還ったのは、出家を決意したことによっても

わかる。生まれて来た嬰児には果して源氏は冷淡であり、今後ますます疎んじられることを思うと、やはり「尼にもなりなばや」（柏木 一三段）と思う。滅多に寄りつかない源氏が、ちょっと顔を出した機会にも訴える。

「なほ、え生きたるまじき心地なむし侍るを、かかる人は罪も重かなり。尼になりて、若しそれにや生きとまるとこころみ、また亡くなるとも、罪を失ふことにもやとなむ思ひ侍る」と、常の御けはひよりはいとおとなびて聞え給ふを、（柏木 一四段）

出家の功徳によって、あるいは命が助かるのではないか、たとい死んでも、そのため罪が滅びるかもしれないと二重に構える所は、もはや柏木の手紙を置き忘れて源氏に見つけられてしまったような、宮ではない。出産の恐しさに、「このついでにも死なばや」と、薬湯をも服用しなかった宮が、生まれて来たわが子のためには死ぬのを思い止まり、せめてはと出家を願うのである。これは、今までの宮を知っている者には、人形が物を言った以上の驚きである。

その後、持仏の開眼供養もすみ、今は念仏に明け暮れる宮を見ては源氏は今更に気の毒になり、何かと宮のために世話をやく。時々やって来ては宮を困らせるが、宮の心はもう動かない。「例の御心はあるまじきことにこそはあなれと、偏にむつかしきことに思ひ聞え給へり」（鈴虫 八段）とある。心中は、次の通りである。

人目にこそ変ることなくもてなし給ひしか、内には憂を知り給ふ気色しるく、こよなう変りにし御心を、A いかで見え奉らじの御心にて、おほうは思ひなり給ひにし御世の背なれば、今はもて離れて心安きに、なほかやうになど聞え給ふぞ苦しうて、B 人離れたらむ御住にもがな、と思しなれど、（同上）

傍線AからBへと宮の道心は堅固をますばかりである。柏木に犯されるという思いがけない不幸―無常に媒介されて、宮は人間性を取り戻し、自分の意見を言い、それを行動に表わすようになったのである。

柏木の発病は、女三宮に書いた手紙が源氏の手に入ったことを聞き、「はづかしく、かたじけなく、かたはらいた」しと恐縮して、暑い季節だというのに、身も氷る思いをしたことから始まる。そうでなくても、事件以来、「空に目つきたるやうに覚え」てびくびくしていたのであった。ところが、朱雀院御賀の試楽の日、源氏から「さかさまにゆかぬ年月よ。老はえのがれぬわざなり」（若菜下 一四二段）と、意味ありげな皮肉を浴びせかけられて、どきりとしたことから、重態になったのであった。

その柏木がいよいよ死を前にして、ふるえる手で宮に書いた手紙、

今はとてもえむ煙もむすぼほれ絶えぬおもひのなほや残らむ
あはれとだに宣はせよ。心のどめて、ひとやりならぬ間に惑はむ道の光にもし侍らむ。（柏木 二段）

今の彼に必要なのは、宮の「あはれ」の一言である。宮の寝室にしのび込んだ時から、繰り返し請うた一言である。それさえ得れば、仏

の光明のように冥途の闇も照らされるというのである。この一途さは、それ自体救済を含んでいる。「よろづのこと、今はのとぢめには、皆消えぬべきわざなり」（柏木　一段）と考えるようになったことでも明らかである。果して、宮から返事があった。

「残らむ」とあるは、

立ちそひて消えやしなまし憂きことを思ひみだるる煙くらべに

後るべうやは（柏木　七段）

しかし、宮は宮で深い憂悶を持つ。一緒に死ぬことが出来ればというが、それは、柏木を「あはれ」と同情することでなく、自分の憂悶に堪えなくてである。彼の憂悶との平行線においてである。「煙くらべに」は、そういう意味であろう。さすがに内親王の気位である。しかし、柏木の宿望は半ば報いられた。「あはれにかたじけなし」と謝する所以である。

行方なき空のけぶりとなりぬとも思ふあたりをたちははなれじ

夕はわきてながめさせ給へ。とがめ聞えさせ給はむ人目をも、今は心やすく思しなりて、かひなきあはれをだにも絶えずかけさせ給へ。（柏木　八段）

生前に得られなかった「あはれ」の一言を死んだ後でもよい、得たいという一心に、あれほど恐れ怖った薫氏に対しても、それを感じなくなった。「今は心安く思しなりて」は、その反映である。この勇気は死に直面したことから得られた。

皇女は未婚のままで生涯を送るという昔からのしきたりを、今も実行させようとしたのが、落葉宮の母御息所である。「初つ方より、をさをさうけひき聞えざりし御事を、大臣（内大臣）の御心むけも心苦しう、院（朱雀）にもよろしきやうに思しゆるいたる御気色などの侍りしかば、さらば自らの心掟の及ばぬなりけり」（柏木　四五段）と、あきらめて、結婚させたのだったが、柏木に死なれた今は、「自らの心の程なむ、同じうは強うもあらがひ聞えましを」（同上）と、後悔している。その御息所が、病気がはかばかしくなく、小野の山荘に移る。山籠りの僧をおろして祈禱させるためである。この僧から、今朝宮の部屋を夕霧の出る所を見たと、聞かされて、会いたがらない宮を無理に病床に呼び入れる。さて、会ってみると、

この二日三日ばかり見奉らざりける程の、年月の心地するも、かつはいとはかなくなむ。（夕霧　二六段）

病人がこんなことを口にするのは死期が近づいているからである。

「後必ずしも、対面の侍るべきにも侍らざめり。まためぐり参るとも、かひやは侍るべき。思へばただ時の間に隔りぬべき世の中を、」（同上）と、泣いてしまう。今生で母子と生まれ合われたものの、あまりにも短く、それがまた、永劫に流転輪廻の中の、ただ一回のめぐり合いであることを思うと、肝心の聞き糺したいことも触れずにしまう。宮もまた言訳をしない。ただいとおしさに、宮を慰めるため食事

を用意させ、病苦を押して給侍する。死が目前に迫っていることを自覚する者には、そうした仏説が単なる仏説ではなく、ひしひしと実感されるからである。死を自覚する者ほど、わが命をも人の命をもいとおしむ者はないであろう。宮に会うまでは、過ぎ去った柏木との事は致し方ないとして、今後は皇女らしく「気高う」暮らさせようと思って、夕霧との事で「世づかはし、軽々し」と、宮が世間の噂にあげられるのをたまらなく嘆いていたのであったのに、さて会ってみると、あれこれ言わないだけでなくその後通って来ない夕霧を貢めて、

女郎花しをるる野辺をいづこととてひと夜ばかりの宿をかりけむ（夕霧　二八段）

と書く。下心では待っていたことがわかる。しかし、この手紙を書きさしたまま、病勢が一変する。死を前にする者には、平常の気位などは構っていられない。人間と人間とのあるべき結び着き方を考えるだけである。その手紙は雲井雁に奪われて夕霧に届かなかった。そんなことを知らない御息所は、彼が来ないのみか、返事さえ寄越さない無情を恨んで、つぶつぶと泣きながら、本心を宮にいうことば、

さても余所の御名をば知らぬ顔にて、世の常の御有様にだにあらば自らあり経むにつけても、なぐさむこともやと思ひなし侍るを、こよなうなさけなき人の御心にも侍りけるかな。（夕霧　三六段）

そうして、「いかなる御宿世にて、云云」と一言いっただけで息が絶えるのであるが、あれほど人聞きを憚った御息所が、それを我慢しよう、世間並に夕霧が通って来てくれれば許そうと思っていたのであった。ここにも死に直面した人間の真実がある。

塗籠の中にこもって、執拗な夕霧を拒み続ける未亡人落葉宮のあまりの手強さに、「岩木よりけに腰き難きは、契遠うて、憎しなど思ふやうあなるを、」（夕霧　七三段）と前生に敵同志であった者は、生々世々相憎み会って輪廻する、仏説の所謂対生の間柄でも二人はあるのかと、夕霧が歎くほどであった。ところがその塗籠にふみ込まれて進退きわまった時、とうとう宮は決意しようとする。「とざまかうざまに思ひめぐらしつつ、わが御心をこしらへ給ふ」（同　七四段）とある。「こしらへ」は「誘ふ」ことである。「われと思ひなだめて、打とけんと思ひなり給ふをいふなり」と、玉小櫛補遺のいう通りである。その夜宮は許したのではないが、翌朝、朝日の光の中で見合う描写に、作者は宮の新生活を暗示する。男は、「いとあてに女しう、なまめいたるけはひし給へり」と見る。女は、「うるはしだち給へる時よりも、うちとけてものし給ふは、限りなう清げなり」と見る。

塗籠に立て籠って、何日も抵抗を続けた宮には、生きる道は、その外にはなかったろう。ぎりぎりの所に追い詰められた以上、その地点で反転せざるを得なかったのである。宮はすでに出家への血路は、「いとあるまじき事」（夕霧　五八段）と、父帝から断たれていたのであった。それはとにかく、宮の選択のよかったことは、前述の寝室描写に、「内は開き心地すれど、朝日さし出でたるけはひ洞り来たるに」にも酌み取ることが出来る。その後日譚として、夕霧からは雲井

雁同様に待遇されていたことが、「丑寅の町に、かの一条の宮（落葉宮）を渡し奉り給ひてなむ、三条殿（雲井雁）と、夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ給ひける」（匂宮　四段）に見える。

夕霧のよろめきに対して、「まめ人の心かはるは名残なくなむと聞きしはまことなりけり」（夕霧　七六段）と、見切りをつけて雲井雁は実家へ帰ってしまった。二人は幼い頃から思い合った仲であった。その結婚には彼女の父内大臣が頑強に反対した。それには二人の祖母大宮の説得も効を奏しなかった。大宮も亡くなり、一周忌の頃から漸く折れるようになり、藤の宴を機会に夕霧を招き、「藤のうら葉のうらとけて君し思はば我も頼まむ」（藤裏葉　七段）と自ら誦じて、遂に二人を許したのであった。

こうした経緯を持つ雲井雁は、正妻として強い自信を持ち、大勢の子供に取り巻かれて、家庭生活を楽しんでいたのであった。それが見事に崩れたのである。早くからの夕霧の思い者に藤典侍というのがある。雲井雁からは目の敵に思われていたのであるが、今回の雲井雁の変り方に、「数ならば身にしられまし世のうさを、人のためにも濡らす袖かな」（夕霧　八一段）と慰めてやった。あてつけがしいことを言うと思うものの、「彼もいとただには覚えじ」と、かえって相手のために一片の同情心を動かすのである。「世とともに、ゆるさぬものに」言っていた自尊心の強い彼女には、これは大きな変化といわなければならない。返歌―

人の世のうきをあはれと見しかども
身にかへむとは思はざりしを

思いあがっていた自分には、今まで他人の苦しみなど夢にも気がつかなかったと、長年の恋敵に自身の不明を披瀝しているのである。彼女は夫の変心にあい、人の世は常ならぬという体験から、即ち、物のあはれなる程のつれづれ」（同上）から、同病相憐むといった暖い人間理解を持つようになったのである。源氏物語が「物のあはれ」を主題とするものだというなら、この意味においては正しいわけである。

第一部の夕霧を知っている者には、落葉宮に血迷う夕霧などは、思いも寄らない。

まめ人の名をとりて、さかしがり給ふ大将、この一条の宮の御有様を、なほあらまほしと心にとどめて、大かなの人目には、昔を忘れぬ用意見せつつ、いとねんごろにとぶらひ聞え給ふ。（夕霧　一段）

夕霧の巻の冒頭である。傍線Aは、直接には女三宮に対する柏木の行為を非難したことを指す。傍線Bのわが行為とは矛盾である。それが、元来が「まめ人」であるだけ、この矛盾は大きい。それを主題としたのがこの巻である。

第一部では、彼が登場して来る所には、「この世に目なれぬまめ人を」（真木柱　四三段）とか、「あり難きまめまめしさなめれ」（行幸　一七段）とか、そんな語が、きまり文句になっている。

一体、この物語に「まめ人」と作者から銘を打たれた人物は誰々だろう。対校の索引によると、一四例中髭黒一、夕霧四、薫七、の三人で、残り二例は、「かかる筋には、まめ人の乱るる折もあるを」（夕

顔）のように、普通名詞である。蕉については、竹河の巻以後に出るので、夕霧は、第一部第二部切っての「まめ人」ということになる。

ところが、彼が一条宮に「住みつき顔」をしている時、花散里が雲井雁のために「三条の姫君の思さむ事こそいとほしけれ。のどやかにならひ給うて」と忠告すると、「らうたげにも宣はせなす姫君かな。いと鬼しう侍るさがなものを」（夕霧　六七段）と、悪口を叩いて取り合わない。実家へ帰ってしまった彼女を迎えに行った彼の、本人に向かって言うことばは、

A ふさはしからぬ御心の筋とは、年頃見知りたれど、然B るべきにや、昔より心に離れ難う思ひ聞えて、今はC かくくだくだしき人の数々あはれなるを、かたみに見棄つべきにやはと、頼み聞えけるを。（夕霧　七七段）

A「おれの女房には、ちと向かねえと思うていたんだが、」B「これも前世の因縁とあきらめて」、C「かわいそうに、ガキどもこうようよいるもんだから」と、世話にくだけてみるまでもなく、これでは全くそこらにある夫婦喧嘩のセリフである。昔源氏が、夕霧をあえて六位の浅葱色にとめおいて、専心学問をさせようとして、大宮の不興を押し切ってまで、「なほ才を本としてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強う侍らめ」（少女　四段）と所信を実行した。その期待に背かず夕霧の抜群の成績は、博士どもをして「さるべきにこそおはしけれ」と、舌を巻かした名残りは、今は跡形もない。倜傑的な教養も、世間的な良識もない。本来の一匹夫に過ぎないではないか。しかし、彼は、この地点から再出発しなければならないのである。彼の家庭は破壊された。雲井雁が逃げてしまっただけでなく、その時は、落葉宮も離いていない。「あやしう中空なる頃かな」（夕霧　七八段）と嘆息するばかりである。この現実に直面して彼は何を得たか。「いかなる人、かうやうなる事をかしう覚ゆらむなど、物慾りしぬべう覚え給ふ」（夕霧　七八段）この一語である。平凡極まる一語である。しかし、彼は彼らしい方法で人生を知ったのである。始めて目が覚めたのである。彼は運命の急勾配を馬車馬のようにここまで走り下りて来た。途中ブレーキも何も利かなかった。幸い彼は、柏木と異り死ななかった。

彼の救済は、その平凡さに徹するより道はなかったであろう。その後の彼については、紫上崩終の時の外は、作者は多くを語らない。ただ、前述匂宮の巻に、六条院の丑寅の町に落葉宮を移して、三条邸の雲井雁と、「夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住み給ひける」と、後日譚として見えるが、このやり方は、いかにも彼らしい。彼としては、これに優る方法はなかったであろう。平凡人に成り下がった彼が、その平凡に生きる道を見出したのである。

15頁の注——

人世間愛欲の中にありて、ひとり生じひとり死しひとり去りひとり来る。行ひを当ひて苦楽の地に至り趣く。身自らこれを当く。代はる者あることなし。（中略）遠く他所に到りぬれば、能く見る者なし。善悪自然にして行ひを追ひて生ずる所なり。窈窈冥冥として別離すること久長なり。道路同じからざれば会見期なし。甚だ難く甚だ難し。復あひ値ふことを得むや。（無量寿経巻下）

六　結び

作者は「日記」に、前述のように、「人は、といふとも、かくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく、経をならひ云云」と、救済を求めるひたむきな態度を告白している。これは、日記の作者が到達した最後の境地ではあるが、その底流は日記の全編を貫いている。作者が未亡人となって、「つれづれにながめあかし」ていた頃、まず取り上げたのは物語であったことは、

いかにやいかにとばかり、ゆくすゑの心ぼそさはやるかたなきものから、はかなき物語などにつけて、うちかたらふ人、おなじ心なるは、あはれにかきかはし、すこしけどほきたよりどもを、たづねてもいひけるを（二六段）

文学同好の友を求めて意見を交換することによって、心を慰めていたと言う。ところが、宮仕えに出てからは、そんなものにも興味が亡くなったというのである。

こころみに、物語をとりて見れども、見しやうにもおぼえず。あさましく、あはれなりし人の、かたらひしあたりも、われを、いかにおもなく心あさきものと、思ひおとすらんと、おしはかるに、それさへ、いとはづかしくて、えおとづれやらず（同上）

あれほど心引かれた物語が、光を消したのである。この変化の原因をなしたものは、女房生活、宮仕生活の煩はしさであった。家にいる時は、それが見えなかったのである。その失望は大きかった。「さものこせることなく、思ひしる身のうさかな」（同上）と嘆かずにはいられない。だから皇子の誕生に天皇が行幸されるという、涌き返るような準備の最中でも、「めでたきこと、おもしろきことを見きくにつけても、ただ思ひかけたりし心の、ひくかたのみつよくて、ものうく云云」と自らを疎外する。救済を求める心が強ければ強いだけ、現実との矛盾に悩むのである。寡居生活も「つれづれ」（二六段）であった。宮仕生活は一層「つれづれ」（四一段）である。しかし、前には慰めるに物語があった。今はそれすらもない。

彼女を慰めた物語は、世間の物語にしろ、自作にしろ、魂の救済をテーマとしたものでなかったことだけは事実である。宮仕生活に入って捨てたことが何よりの証拠ある。それは、ただ、世間的に辻褄を合わそうとした――中庸とか何とかいって、世間的なごまかしをテーマにしたものに過ぎなかったのである。そんなものに救済のないことを知ったのである。この種の物語がもしも自作なら、寡居時代に書いたこの物語の第一部がそれに当る。彼女は、そんなものに強く反発するのである。しかし、今の心境に適した物語はない。それを書いたのが第二部ということになる。あまりにも大きい、この物語の一部と二部との断層を、私はそう解釈する。めでたし、めでたしで終った第一部の人物を、一人一人無常の俎に載せ、それによって本人自身、それぞれに行くべき道を辿ばせようとしたのである。真の救済はこの無常を媒介するより方法のないことを、彼女は宮仕えに出て知ったのである。

――一九六二・七・一五――